

資料紹介

新制大学設置認可申請書

神戸女学院は創立以来、「キリスト教人格主義」や「リベラルアーツ教育」と共に「国際精神」を大切に育んできた学校である。宣教師の教育—その祈りに基づいたキリスト教人格主義の教育や、リベラルアーツの教育—は、今日の大衆化の時代、世俗化の時代には、そのままの形では実現できない教育といえるかもしれない、と今から40年以上前にかつての院長は言った。今日の私学やキリスト教学校にとって必要なのは「開き直りの精神」や「居直りの精神」であり、また実存哲学で言う「にもかかわらず(trotz dem)の精神」であると思う、^①とも。

またある人はこうも言う。神戸女学院の教育は、一見、ナイーヴな理想主義に見えながらも、決してそれだけではなく、矛盾にみちた人間社会や国際社会のどろどろした暗い現実の中にまきこまれても、単なる現実的な政治主義に終わらせず、また、ニヒリズムやシニリズムに落ちこませない、一つの「歯止め」のようなものを内包させていたように思う。「キリスト教」と「国際主義」、この二つは、神戸女学院の教育理念の二本の柱であり、その二つは深く切り結ぶ構造を持っていたのだと思う、と。^②

2018年、神戸女学院大学は新制大学設置70年を迎えた。戦後他の大学に先駆けて新制大学となった神戸女学院は、戦前の専門学校を基盤として大学を設立した。終戦間際の1944年、専門学校には、外国語科、家政科(保健科と育児科)、音楽科とそれまであった高等部本科から性格を一変した経済科が置かれていた。これが新制大学に至る直前の神戸女学院の状態であった。

では、戦前の神戸女学院の高等教育の理念、カリキュラムはどのようなもの

であったのだろうか。

神戸女学院の高等教育は1885年、一年制の高等科を設置したところから始まる。当時、アメリカの Mount Holyoke に代表される女子高等教育機関が行なっていたリベラルアーツ教育をモデルにカリキュラムが考えられた。ギリシャ・ローマ以来の教養教育の伝統とキリスト教的人格形成の伝統を基盤にして自由人の形成を目指す all round education がこの時から行なわれるようになる。1891年には三年制の高等科が設置され、文科、理科の二つのコースを持つカリキュラムが作られ、本格的なリベラルアーツ女子高等教育となった。当時のカリキュラムでは理化学的な科目が重視され、特に実験を伴う授業があったことが特徴といえる。これは本場アメリカの Mount Holyoke のカリキュラムを参考に作られている。このカリキュラムはその後充実が図られ、1908年四年制となり、1909年専門学校令による認可を受けるに至る。

戦前の高等教育の理想の形を実現したのは、第5代院長 Miss Charlotte Burgis DeForest であったといえるだろう。1915年院長就任後、専門部を大学部と改称し、英語科教員無試験検定の資格を当時、関西では唯一取得、キャンパスを移転するなど、女子大学設立に向けての準備を着々と進めていった。残念ながら、大学部改称の際、理科の専修コースはなくなったが、選択科目としての理科はカリキュラムに残った。その後、時代の流れにともなって、カリキュラムは改訂を余儀なくされる。大学部は専門学校の一課程となり、神戸女学院では唯一英語を必修としない二年制の家政科が開設されたりもした。大学部より修業年限の短い高等部が作られ、そこで教員免許が取れるようになったため、大学部は衰退していったが、1944年、最後のカリキュラム改訂で大学部、高等部の各科が廃止されるまで、神戸女学院が理想としていたカレッジ教育は続けられた。最後の大学部卒業生は1945年10月12日に卒業したので、戦前は一貫してカレッジ教育が行なわれていたと言って差し支えない。

新制大学は1948年に認可されたが、専門学校の制度は1954年7月14日まで存続した。神戸女学院においても新制大学設置は文部省の方針に従って、他の学

校と歩調を合わせるつもりでいた。しかし、戦前に学院で教鞭をとったことのある Miss Lulu Holmes が GHQ のスタッフとして来日しており、彼女のアドバイスを受けて、申請を 1 年早めたという経緯がある。この時、学院が目指した大学の姿はどのようなものであったのか。

意外なことに女子大学にこだわらないという考えがあった。新しい政府の方針は、戦前の日本の大学とは性格を異にし、アメリカの大学に倣ったリベラルアーツの全人教育を強調するものであった。専門学校が短期大学に転換するということも考えられていた。デフォレスト先生は言う。神戸女学院は 4 年より短くしようとは思わない。戦前の大学は専門教育だった。新制度である四年制リベラルアーツ・カレッジは幾分程度が低く、専門性に欠ける。私立学校である神戸女学院は男女共学を採用する新制度とは比べることは出来なかった。畠中院長は女子教育にこだわった。しかしそれはかつての日本では女子に同等の機会がなかったからにすぎない、と。^③女子大学にこだわらなかったのはデフォレスト先生であった。畠中院長の根本方針は学内の一致とリベラルアーツの重視ということであった。この点において異論の余地はなかった。そのため、名称についても最初「大学」といわず、「大学部」が主張されたというが、スタッフ側の意見も尊重して「大学」という全国共通の名称が採用された。^④

1947 年 9 月、理事会は新大学に文学部と家政学部を設け、文学部には英文、国文、歴史の 3 学科、家政学部には食物、育児、社会の 3 学科を置くことを決議した。^⑤カリキュラム立案のために 1947 年 11 月、デフォレスト先生を委員長に宣教師を含め 8 人の委員で構成された学科課程委員会が作られ、審議が進められた。結局、先の案は実施困難ということで文学部のみにし、その中に英文、社会、家政、国文、歴史の 5 学科を置くことにした。その後、文部省との交渉によって文学部の中に英文、社会、家政の 3 学科を置く単科大学として認可されるに至った。大学設置認可申請は急なことであったため、将来の改正に含みを持たせるものであった。認可した大学設置委員会も「現行基準を以て完成の域に達したものとするのではない」として、以降の専門学科の充実を示唆していたという。そのため畠中院長は教育学科を作るという意見を持ち、他にも歴

史学科・国文学科を内包した人文学科を作るという意見もあったという。^⑥

こうして誕生した新制女子大学はどのようなものであったのか。以下、大学設置認可申請書の資料紹介をしつつ、その姿を見ていきたいと思う。

神戸女学院には新制大学設置申請に関して、2冊の申請書が存在する。製本された簿冊の背表紙によれば、『大学設立許可申請書 昭和二十二年度』（以下、「許可申請」と『大学設置認可申請書 昭和二十三年度』（以下、「認可申請」）の2種である。

「許可申請」には目次はなく、兵庫県知事、文部大臣宛て許可申請の書類から始まる(昭和22年9月30日付)。そして大学設立についての内容説明、学則と続き、昭和23年度臨時理事会決議録の写しが添付されている。このあと具体的な大学の内容について書かれている。「認可申請」にも同様に目次はなく、最初に文部大臣印のある設置認可書(原本)が綴じられ、そのうしろに申請書(昭和23年2月26日付)と続く。二つの申請書を比べると、5か月の間に変更された箇所のあることが見て取れる。大学設置の目的及び使命(現在でいうところのミッション・ステイトメント)は「認可申請」のみにある。

目的及び使命

「本學は基督の教に基いて教育を施し女子をして廣く知識を究め深く専門の學藝を修めまた高く人格を磨かしむることを以て目的とする。而してこの目的の達成を期するとともに本學に學

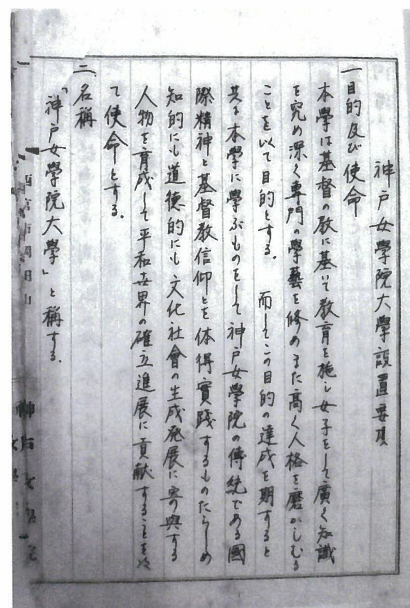


写真 1

ぶものをして神戸女學院の傳統である國際精神と基督教信仰とを体得實踐するものたらしめ知的にも道德的にも文化社會の生成發展に寄與する人物を育成して平和世界の確立進展に貢献することを以て使命とする。」〔写真1〕

ここに掲げられたキリスト教教育の理念は、先に見てきたように神戸女學院が創立時から一貫して持ち続け、戦時中もひそかに絶やすことのなかったものである。「軍国主義時代の苦しさが大きかっただけに、この理念の再確認は意義深いものがあり、喜びでもあった。」^⑦

設置要項は両方にあるが、「許可申請」の方は「設立について」という設置要項のダイジェスト版となっている。この部分が神戸女學院大学の教育理念を最もコンパクトに表しているの、これを中心に紹介していく。

教育の目的

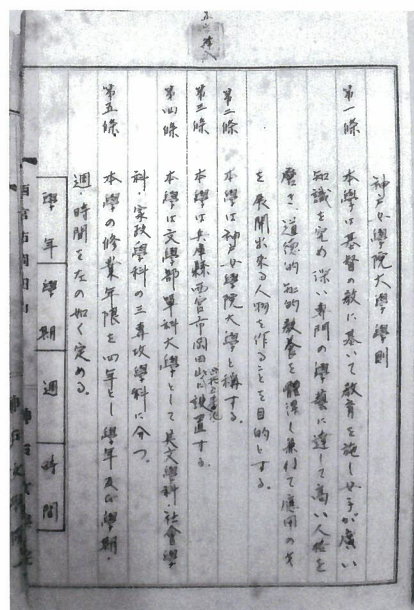


写真 2

教育の目的について学則第一条は「本學は女子に廣い知識と専門の學藝を教授すると共に、基督の教に基いて教育することを目的とする。」から「本學は基督の教に基いて教育を施し女子が廣い知識を究め深い専門の學藝に達して高い人格を磨き、道德的知的教養を体得し兼ねて應用の才を展開出来る人物を作ることを目的とする。」という文言になり〔写真2〕、キリスト教主義を前面に出し、よりリベラルアーツ教育を強調する内容となっている。これは設置要項にある「目的及び使命」の内容を反映したものである。

新制大学の具体的な内容については「認可申請」をもとに紹介していく。

「履修方法及び学位授與概要」〔写真４〕には必要単位の記載があるが、「許可申請」では、「一般教養科目中各系列に亘って夫々三科以上、全体として十二科目以上學修し四十五単位以上を専門専攻學科と其の補助學科で七十五単位以上を修得せねばならない」としていたが、最終的には一般教養科目15科目(学則第八条)、最低要求単位124の内一般教養科目44単位以上、専攻科目80単位以上に変更になったことがわかる。新制大学基準(最低要求単位120)に準拠する

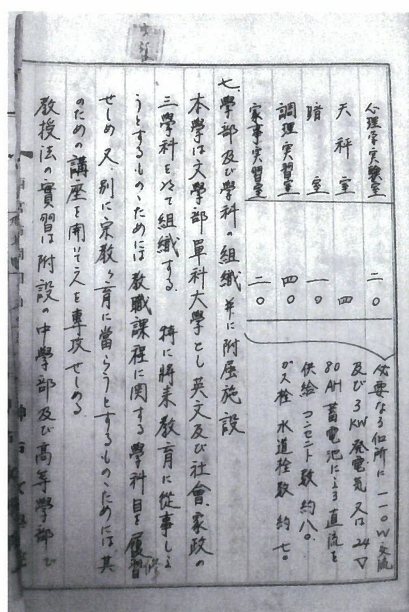
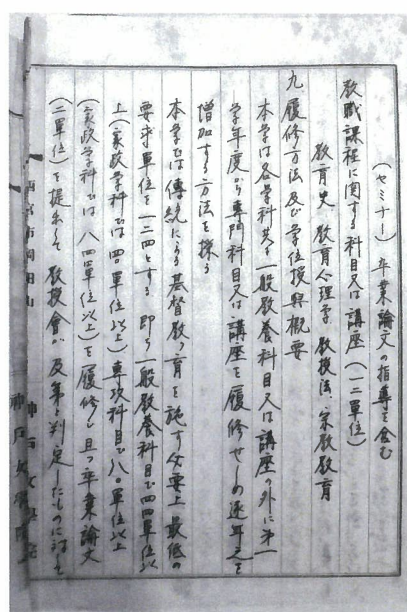


写真 3



写直 4

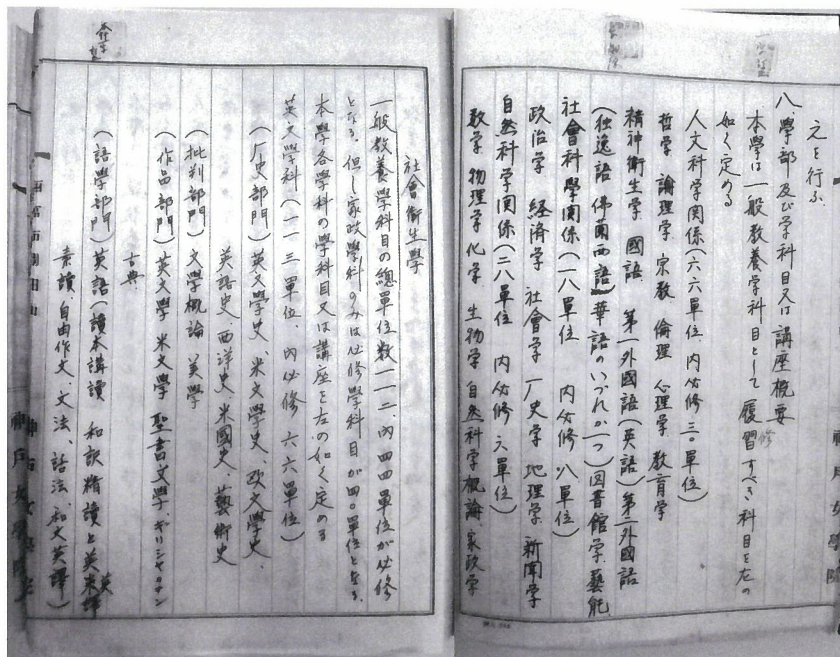


写真 5

がキリスト教教育のために他の大学より最低単位数が多くなっている。学則第七条にも同様の言及がある。

一般教育科目が設けられたのは新制大学の最大の特徴の一つであり、この一般教養の「全人的教育」としての特色がその根本においてキリスト教主義教育の理想に合致する。^⑧

専門的な狭い研究よりも広い視野に立つことを目的としていたため、一般教養について偏った選択に陥らないように人文科学系、社会科学系、自然科学系の3分野のいずれからも選択することになっていた〔写真5〕。人文科学系には藝能があり、具体的な科目名は記されていないが、音楽科の科目を受けることができた。これは神戸女学院の特色であった。^⑨

ちなみに音楽学部について言えば、新制大学申請時には音楽科の大学昇格は見送ったが、1949年に音楽科として認可され、その後、1952年に音楽学部とし

て独立を果たす。

教職員組織

申請時の予定では、学長 1 名、教授および助教授各 12 名、講師 22 名(学科別にすると、一般教養学科関係 14 名、英文学科 8 名、社会学科 13 名、家政学科 11 名)であったが〔写真 6〕、大学発足の際の実際の教授陣としては、学長 1 名(院長兼任)、専任教授 26 名(一般教養学科関係 11 名、英文学科 7 名、社会学科 2 名、家政学科 6 名)の名前が挙がっている。予定数から見て、あと 20 名が講師ということになるが、ほぼ専任で運営される英文学科に比べて、家政学科はほぼ半数、社会学科はほとんどが講師であ

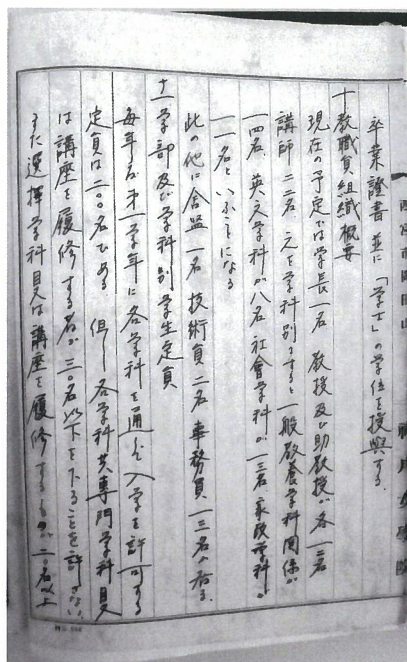


写真 6

ったことがわかる。また、一般教養学科関係には、ほぼ専任で構成される英文学科の約 1.5 倍の人数を当てており、担当科目から見ていくと、戦前から神戸女学院で教えていた英文学、社会学、家政学以外の教養系と目される科目の先生方の約半数が学科所属ではないということもわかる。リベラルアーツ大学として一般教養(キリスト教、体育を含む)に力を入れているということの表れであろう。^⑩

註

- ① 岡本道雄「近代日本の女子教育と神戸女学院」『神戸女学院百年史 各論』神戸女学院、1981年(以下「各論」と略す)、339ページ、360ページ。
- ② 武田清子「思想史的に見た昭和期の学院」『各論』385ページ。
- ③ DeForest, C.B., *The History of Kobe College*, 1950, p.193.
- ④ 溝口靖夫「近代日本におけるキリスト教の受容と神戸女学院」『各論』100ページ。
- ⑤ 『神戸女学院八十年史』神戸女学院、昭和30年(以下「80年史」と略す)、192ページ。

ジ。

⑥ 『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院、1976年(以下「総説」と略す)、301ページ。

⑦ 「総説」286ページ。

⑧ 「80年史」195ページ、196ページ。

⑨ 「総説」300-301ページ。

⑩ 「総説」300ページ。また、専門学校の5学科を新制大学の3学科に編成するに当たっては苦労が多かったという(「総説」298-299ページ)。

(佐伯裕加恵)